平成２９年度　群馬大学教育学部
推薦入試・帰国生入試問題

社会専攻

小論文

注意事項

1．試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2．問題に落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所があった場合は申し出てください。
3．受験番号は解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。
4．問題冊子は持ち帰ってください。

現代社会の人々のつながりかた（人々のネットワーク）の特徴と課題について分析した次の文章を読んで、問いに答えなさい。

孤立者には，仲間はずれ，ひきこもり，せいぜい隠遁者といったネガティブなイメージがつきまといます。中高生はもちろん大学生になっても，孤立を恐れるあまり，自分の行動を決める際に友達の反応を過剰に意識する人は少なくありません。多くの人にとって「孤立は孤独」であり，「孤独」は望ましくないことのようです。

国家，自治体や地域はおろか，学校や会社など大きな共同体への帰属意識が弱まる一方で，身近な仲間や集団の一部であることで，安心と安全を獲得するわけです。

その一方で，現代社会では少なからぬ数の人々が，ひきこもりと言われる状態におり，そのことで，本人，家族をはじめとする周囲の人々の心を痛めています。（中略）

共同体への帰属意識はなく，その一方で孤立を過度に恐れる傾向が若い人々に強まっています。同時に，社会関係を限りなく絶って暮らしているひきこもりと呼ばれる人々も増加しています。この同時進行は何をもたらすのでしょうか。

人々が孤立を恐れる社会では，同調圧力が強くなります。同調圧力の強い集団は，変わり者や異端者に対する寛容性が低く，集団によるスケープゴートや魔女狩りを生み出しやすくなります。共感できない人との共存能力が下がるのです。（中略）

アメリカの詩人，メイ・サートンの『独り居の日記』は，長年，住んでいた土地を離れ，知人も友人もいないニューハンプシャーに転居した彼女が，庭造りを楽しみつつ創作に邁進し，土地の人々と関わりその地に定着してゆく，（中略）誇り高い生活を描いた名著です。

家族もなく物理的に孤立した生活ですが，彼女は孤独であったでしょうか。

彼女は，リルケの言う「親しい人の間の無限の距離」について論じています。

「親しい人の間には無限の距離がある」という考えかたは，親しい関係の紐帯力は強いと考える，ネットワーク分析とはやや相容れません。むしろ伸縮自在に，必要な時には寄り添い，不要な時には距離をおくといった伸縮自在な関係こそが「無限の距離」とされています。

他者から，固定的に一定の距離をおかれ，そこから相手に近寄らせてもらえない状態であるならば，その孤立は孤独をもたらすでしょう。ですが，一方で，他者との間に伸縮自

在な，状況に応じた距離を設定しうる時には，関係が存在しない時間がある程度続くことも考慮にいれても，「孤立＝孤独」というわけではありません。

彼女の生活の基礎には「自立」があります。そのうえで，精神的な「孤独さ」をいさぎよく引き受けています。周囲に人間が多数いるなかで感じる孤独のほうが，物理的に他人がいない「孤立」よりは辛(つら)いこともあります。（中略）

自立はしていても孤独ではないのか，自立していて孤独であるのか，充足しているのか，関係を希求しているのか，その状態の識別ができてこそ，「親しい人」たりうるのかもしれません。

そして同時に，自分と他者との間に，双方にとって「望ましい距離」をおくことは至難の業です。相思相愛，醒(さ)めかかった恋愛関係，片思い，無関心からストーカーまで，自分と他者との距離は，一方で簡単に決められるものではありません。関係の距離とは，自他相互の認識と意志に基づいて，その持ち主である両者が定義するものです。その距離は，相手が一定であっても，時により日により，あるいは体調や状況といった外的要因によっても変わりえます。両者に合意が成立しない場合も多々あるものです。

重要なのは，無縁者を出さないような弱い関わりをはりめぐらせつつ，同調圧力の強すぎない社会的なつながりかたの模索ではないでしょうか。

出典：安田雪『パーソナルネットワーク ― 人のつながりがもたらすもの』新曜社，2011年（出題の都合上，一部表記を改めた。）

問１　著者の述べる「孤立」と「孤独」との違い，及び「人々が孤立を恐れる社会」の弊害について，400字程度で説明しなさい。

問２　「親しい人の間には無限の距離がある」というメイ・サートンの考えかたを参考にして，「無縁者を出さないような弱い関わりをはりめぐらせつつ，同調圧力の強すぎない社会的なつながりかた」を模索する（下線部）うえで大切なことは何か，あなたの考えを400字程度で述べなさい。